

山本明コレクションにみる 全神戸映画サークル協議会の地域性

上 田 学*

1. はじめに

本稿は、京都大学人文科学研究所が所蔵する山本明コレクションにおける、全神戸映画サークル協議会の関連資料をもとに、とりわけ映画館との関係にみられた地域性を考察することが目的である。

まず、映画サークル運動に関する先行研究について概観したい。映画サークル運動については、これまで同時代に様々な立場から多様な言説が生み出されてきた¹⁾。そのような言説を踏まえて、1950年代に活性化したサークル運動のなかで、特に映画サークル運動に着目して論じたのが、成田龍一である。成田は、全国映画サークル東海地方協議会の事例をとりあげつつ、『どっこい生きている』（今井正監督、1951年）に関して、映画を観る主体と映画を製作する主体の一致がみられた貴重な瞬間であり、その背景に「階級」のリアリティがあったことを指摘した²⁾。さらに観客論として映画サークル運動の全体像を展望しているのが、佐藤洋である。佐藤は、映画サークル協議会が政治主義の運動として定義されてきた言説を否定し、実際には独立プロダクション作品への観客動員を通じた興行的貢献から、映画館の入場割引の斡旋による会員獲得への移行こそが、1950年代の運動の本質であったと論じた³⁾。そして映画館の割引制度廃止にともなう会員減少を経て、1960年代の自主上映と批評革新という二つの新たな方向に向かうなかで、新左翼との分裂が逆に映画サークル運動の政治的立場を決定させ、停滞をもたらしたとするのである⁴⁾。

このような映画サークル運動において、その活動に大きな転換をもたらしたのが、1957年の「環境衛生関係営業の運営の適正化に関する法律」による影響である。この法律について、その影響が特に大きかった、東京映愛連の幹事である山之内重己が、端的に下記のように述べ

*うえだ まなぶ 神戸学院大学人文学部

ている。

環境衛生法により半強制的に（興行——引用者）組合が作られるのを契機に結束力を利用して先の障害（映画館の乱立やテレビ放送の普及など——引用者）をのぞき組合の力を社会的にも内部に示そうと、一番やりやすい入場料金のダンピングにもなる。そこで、割引をやめるということに手をつけ、映画サークルの会員証割引を停止させる手段に出たのである。⁵⁾

このような映画館の入場割引停止は、それまでの映画サークルと興行組合の関係によって、地域的な影響の多寡もみられたものの、概して全国的に会員数の急速な減少をもたらした。そうした映画サークル運動の低迷期において、映画批評の革新という、新たな方向性を牽引していくこととなったのが、全神戸映画サークル協議会である。

全神戸映画サークル協議会の後継団体である神戸映画サークル協議会は、現在も充実した活動を継続している、数少ない映画サークルの一つである。その歴史については次節で概観するが、山本明コレクションには、山本が全大阪映画サークル協議会の委員長を務めていた関係もあり、全神戸映画サークル協議会の関連資料が多数含まれている。これらの資料をもとに、全神戸映画サークル協議会の歴史的、地域的な位相について、本稿は再検討していきたい。

2. 映画サークル運動における全神戸映画サークル協議会の位相

全神戸映画サークル協議会は、全国の映画サークル運動が衰退をみせるきっかけとなった1957年の「環境衛生関係営業の運営の適正化に関する法律」以降に、映画批評の革新に向けた独自の展開を示していったことが知られている。その経緯については、すでに塩見正道が明らかにしているが⁶⁾、ここでは塩見の研究を踏まえ、その概要をまとめておきたい。

全神戸映画サークル協議会が結成されたのは、1950年のことである。東宝争議を支援するために日本共産党の指導のもとに始まった映画サークル運動は、神戸でも労働組合を母体とした複数の映画サークルを誕生させた⁷⁾。それらを組織化する全神戸映画サークル協議会が結成され、『どっこい生きている』（今井正監督、1951年）の上映支援が、その活動の始まりとなった⁸⁾。他の映画サークル運動と同様に、全神戸映画サークル協議会においても、独立プロダクション作品の上映支援から、やがて映画館の入場割引の斡旋へと運動の重点が移っていくが、1957年に東京都興行生活衛生同業組合が東京映愛連に割引停止を通告したことを皮切りに、全国で同様の事態が生じ、1959年には神戸でも、神戸興行協会が全神戸映画サークル協議会に会員証の提示による割引停止を通告する⁹⁾。

このような会員急減の事態に、映画サークル運動に二つの方向性が生じた。ひとつは、1959年の『戦艦ポチョムキン』の上映成功に端を発した、時実象平らによる自主上映運動であり、これがそれまでの各地の映画サークル運動にとって代わり主流となっていった¹⁰⁾。東京の映画サークル協議会の連合体である東京映愛連が、1962年に東京勤労者映画協議会となり、映画サークル運動と自主上映運動の統合が図られたのは、その一例である。もうひとつは、全神戸映画サークル協議会の事務局員であった木崎敬一郎が提唱した新たな映画批評の方向性、いわゆる「木崎理論」である。

木崎が提唱する「木崎理論」とは、どのようなものだったのだろうか。端的に言えば、それは批評活動によって観客に新たな視点を提示し、さらに観客の反応を批評活動に取り入れるという循環を通じて、「大衆」の文化的変革を図るというものである。彼の主張が一躍脚光を浴びることとなった、1959年の第五回映画観客団体全国会議において、木崎は「映画文化の変革を目指す運動集団 映画サークル協議会の性格について」と題した報告をおこなった。そのなかで、映画サークル運動を「映画文化の変革を目的にした文化運動体」と定義し、「大衆の文化意識の変革」のために、映画批評を通じて「運動主体の価値観をつねに大衆のなかで検証し、大衆のなかの価値観をつねに運動主体が発展的に吸収できる」という、「批評の循環運動の通路を確保することが大切」と主張するのである¹¹⁾。そこでは「組織をあげての「良い映画」への大量動員で、日本映画の質を変えられるといった幻想は、いさぎよく棄てるべきである」として、かつての上映支援や入場割引、さらに自主上映に向かおうとする運動のドミナントな方向性にも矛先が向けられている。

このような木崎の主張は、自主上映運動に向かうよりも、むしろ映画サークル運動の質を高めることに価値を見出そうとする人々には支持されたものの¹²⁾、必ずしも広汎な理解を得たわけではなかった。全神戸映画サークル協議会の内部ですら、発行誌の『泉』の記事の難解さに批判が生じて、1959年に木崎は責任編集者を外されてしまう状況であった¹³⁾。

さらに、以前から木崎が『安保条約』（松本俊夫監督、1959年）、『西陣』（同、1961年）を批判していたことに対し、松本俊夫が政治至上主義の「大衆バカ」の筆頭として、木崎の名前を挙げて批判したことが¹⁴⁾、彼の否定的評価を決定することとなった。木崎が全神戸映画サークル協議会内で立ち上げた、大衆批評研究会による雑誌『大衆批評-a』も、映画監督の山際永三に「発行されているということは並大抵の努力ではない」「怠惰な映画人など、神戸映サのツメのアカをせんじてのむべし」と評価されつつ、内容については松本の批判を踏まえ、「木崎の考え方の中にはぬけがたく、芸術と政治の混同、作家と作品の同一視といった、正に日本の近代インテリに共通した自然主義的人間主義的な発想がある」¹⁵⁾と切り捨てられてしまったのである。

ただし、逆にいえば、神戸から生じた映画に関わる言説が、これほど全国的に広汎な議論を

引き起こした事例は、それまでの映画史においてほとんどなかった¹⁶⁾。この点で、全神戸映画サークル協議会は、日本映画史における地域の役割を考えるうえで、興味深い研究対象であるといえることができる。

3. 山本明コレクションにおける全神戸映画サークル協議会の発行誌

前節で、全神戸映画サークル協議会の映画史的な位置づけについて述べてきたが、ここで山本明コレクションに含まれる同会の発行誌について、整理しておきたい。

映画サークル運動から生まれた雑誌『映画批評』の誌上で、「神戸では一般向けの『泉』とサークル問題のために『サークル』批評活動や理論のために『レフレクター』と三つ出しているのが感心しました」と官公庁映画サークル協議会会長の吉村道子が評し、高倉光夫（山際永三の筆名）が「神戸の機関紙活動がこんなに発展している」と応じたように¹⁷⁾、東京においても全神戸映画サークル協議会の活発な出版活動は評価されていた。

実際に、山本明コレクションから確認できる、全神戸映画サークル協議会の発行誌（後継の神戸映画サークル協議会のものを含む）は【表1】である。ここから、よく知られていた『レフレクター』や『サークル』、『泉』以外にも、多様な雑誌が発行されていたことがわかる。ただし、雑誌としての活字印刷の形態をとっていたものは、『泉』や『映サニュース』、『神戸映画旬報』、『映画サークル』などに限られており、『レフレクター』や『サークル』も冊子として記事は充実しているものの、簡易な謄写印刷によるものとなっていた。こうしたことから、発行誌は決して全国各地の読者に情報を発信するようなものではなく、あくまで神戸という地域の限られた読者層を対象としていたと考えられる。ちなみに、『泉』『映サニュース』は月刊で読者層は一般会員、『サークル』も月刊で読者層はサークル代表者や活動家、『レフレクター』は季刊であったとされている¹⁸⁾。

次節からは、これらの発行誌および関連資料から、特に二つの時期に関して焦点を絞り、考察を進めたい。第一は、全神戸映画サークル協議会の結成当初の映画館との関係であり、第二は、全国的に映画サークル運動への入場割引が廃止されていった時期の、同じく映画館との関係である。

4. 結成当初の全神戸映画サークル協議会と映画館の関係

1950年の結成当初の全神戸映画サークル協議会は、【表2】の映画サークルによって構成されていた。【表2】の出典である山本明コレクションの「全神戸映画サークル協議会 組織表」(213-01-0154r)には、「サークル数 50」との記載があるものの34しか確認できず、また塩見

山本明コレクションにみる全神戸映画サークル協議会の地域性（上田）

表1 山本明コレクションにおける全神戸映画サークル協議会・神戸映画サークル協議会の発行誌

資料番号	誌名	巻号	発行所	発行年	形態
213-01-0043	『映画短信』	3号	全神戸映画サークル協議会	1950年10月	謄写版
009-01-0092・ 213-01-0044～ 213-01-0055	『映画時報』	1・号外・2・3・5～8・13・14・ 16・17・20	全神戸映画サークル協議会	1950年8月～ 1953年9月	タブロイド、謄写版 (号外のみ)
213-01-0087～ 213-01-0091・ 213-01-0093・ 213-01-0094	『映画鑑賞のシオリ』	2・3・21・24・25・27・特別号	全神戸映画サークル協議会	1952年12月～ 1954年6月	謄写版
213-01-0116～ 213-01-0120	『レフレクター』 『れふれくたあ』	2・2・6・7号	全神戸映画サークル協議会・ 映画研究部	1953年9月～ 1957年11月	謄写冊子
213-01-0015・ 213-01-0030	『神戸映画の友』	34・38・39・51・52・54～57・ 特別・58～62号	全神戸映画サークル協議会	1954年11月～ 1957年9月	謄写版(39号まで)、 謄写冊子
213-01-0092・ 213-01-0128	『部報』『映研部報』	1・5号	全神戸映画サークル協議会・ 映画研究部	1955年1月～ 1956年8月	謄写版(1号)、謄写 冊子
213-01-0008～ 213-01-0014	『サークル』	1～7号	全神戸映画サークル協議会・ 常任幹事会	1956年12月～ 1959年2月	謄写冊子
213-01-0097	『雑音』	2号	全神戸映画サークル協議会・ 映画研究部	1957年6月	謄写冊子
213-01-0031～ 213-01-0042・ 213-01-1559・ 213-01-1578・ 213-01-1580・ 213-01-1582・ 213-01-1584・ 213-01-1586・ 213-01-1588・ 213-01-1590・ 213-01-1592・ 213-01-1594	『映サニュース』 『神戸映サニュース』		全神戸映画サークル協議会	1956年2月～ 1959年5月	謄写版(1956年発行 分のみ)、活字冊子
213-01-0103・ 213-01-0104・ 213-01-0106～ 213-01-0114・ 213-01-1560・ 213-01-1561・ 213-01-1563・ 213-01-1574・ 213-01-1575	『神戸映画旬報』	64～74号	全神戸映画サークル協議会	1957年10月～ 1958年7月	活字冊子
213-01-0098	『リール・クラブ会報』	1号	全神戸映画サークル協議会・ リール・クラブ	1957年12月	謄写冊子
213-01-0056～ 213-01-0060・ 213-01-0062～ 213-01-0068・ 213-01-0070・ 213-01-0071・ 213-01-1577・ 213-01-1579・ 213-01-1585・ 213-01-1587・ 213-01-1589・ 213-01-1593・ 213-01-1596～ 213-01-1607	『泉』『泉ニュース版』	75～97・99・119・124・127 号	全神戸映画サークル協議会	1958年7月～ 1962年9月	活字冊子
213-01-0115・ 213-01-0134	『エクランの友』		全神戸映画サークル協議会・ エクラン友の会	1959年2月	謄写冊子
213-01-0139	『戦艦ポチョムキン』神戸 上映促進会ニュース』	1号	全神戸映画サークル協議会	1959年3月	謄写冊子
213-01-0173・ 213-01-0175	『映画批評』	1・2号	神戸映画サークル協議会	1967年7月～ 1969年5月	謄写冊子(1号のみ)、 活字冊子
213-01-0072～ 213-01-0086	『映画サークル』	192・194・195・200・201・ 203～205・208～210・213・ 214・229・236号	神戸映画サークル協議会	1968年2月～ 1971年10月	活字冊子

の先行研究にみられた帝国酸素、日本発動機などの労働者による運南地区協議会がみられないため、当時の映画サークルすべてを網羅していない可能性もある。しかし、その分布は運南地区を除いてもなお、海岸通の7団体、波止場町の2団体、東川崎町の2団体、新港町の2団体など、港湾に面した地域が半数近くを占めていることがわかる。

その点を踏まえ、当時の全神戸映画サークル協議会が入場割引を提携していた映画館についても、あわせて考えていきたい。【表3】は、全神戸映画サークル協議会の結成当初の1950年

表2 結成当初の全神戸映画サークル協議会を構成した映画サークル

地 区	サークル名	所在地	責任者
東部地区 協議会	日本エヤーブレーキ	葺合区脇浜町三丁目 2058	玉田義雄
	再製樟脳	葺合区脇浜町一丁目 31	野上光昭
	神鋼	灘区新在家南町二丁目 1ノ9	白石広澄
	五毛クラブ	灘区五毛通二丁目 33	野口栄蔵
	安田海上火災	生田区栄町二丁目 49	唐津加代子
	大同運輸	生田区海岸通三丁目 2	紺崎朝治
	教組分会	生田区中山手四丁目	岩槁哲夫
	県職	生田区中山手県庁内	大谷好夫
	港湾地区	生田区波止場町 27 ■検数分会	岸本平八
	商工会議所	生田区海岸通一丁目 16	粕谷健一
	神戸電報局	生田区西町 34	田尾由文
	税関	(生田区新港町)	大久保市太郎
	特調	生田区海岸通一丁目 16	佐伯英夫
	水玲会	生田区海岸通商船ビル二階大阪商船事務室	江島美恵子
	N709	生田区海岸通商船ビル浜根汽船(株)	中村たい
	日本海運	生田区海岸通郵船ビル	加島薫
	SS	生田区波止場町新日本汽船資材部	前田明
	神戸銀行	生田区浪花町 56	大西央
	花花	生田区新港町 71 日田ランドリー	橋高次郎
大日通運	生田区海岸通一丁目 5	植田功	
中部地区 協議会	神港新聞	兵庫区湊町三丁目	佐野良政
	川崎造船	生田区東川崎町二丁目 14	篠原正一
	映サみどり	生田区相生町中詰	井上正美
	川車	兵庫区下祇園町 33ノ12	井上隆
	神戸交通	長田区四番町二丁目 1	棚野昇
	関配湊川	兵庫区湊町関配湊川	小西賢一
	辻村洋裁学院	生田区楠木町五丁目 10	細すみ子
	弁天浜	生田区東川崎町一丁目 38	鄭滝■
	阪内	長田区一番町三丁目	立花勝茂
西部地区 協議会	長田郵便局	長田区菅原通七丁目 5	
	須磨電報局	須磨区稲葉町 2	肥塚義男
	建設省六甲	須磨区東須磨省水野工事所	田村
	須磨高校		
	神船第一	兵庫区和田岬三丁目	

「全神戸映画サークル協議会 組織表」(213-01-0154r) より作成

山本明コレクションにみる全神戸映画サークル協議会の地域性（上田）

の段階で、入場割引に対応した映画館の一覧である。

一見してわかるのが、新開地と三宮の両地域に、会員割引の対象となる映画館が集まっている点である。この二地域が、当時の神戸において中心的な映画館街を形成していたため、このこと自体は当然といえるが、詳しくみていくと異なる傾向があることが理解できる。

第一に、1950年から翌年にかけて、新開地においては6館から8館へとさらに割引対象の映画館が増加しているのに対し、三宮においては交渉中とされる4館を除けば、4館から2館へと、逆に減少がみられる点である。第二に、そもそも1950年の段階でも、割引方式に大きな違いがみられる点である。新開地の場合、割引対象の6館のうち半数が、単に会員証を提示するだけで入場割引を受けられたのに対し、三宮の場合、会員証の提示のみで入場割引が適用されたのは1館に過ぎず、興行側の指定作品のみに入場割引が限定されていた映画館も存在した。第三に、割引対象の映画館の規模が、1950年に交渉中のものを除けば、新開地は松竹座やロマン座、神戸大映、相生座といった、定員700名を超える大規模な映画館が含まれていたのに対し、三宮は4館すべてが定員500名以下の中規模の映画館に留まっていた点である。

このような傾向の理由として、全神戸映画サークル協議会の会員が、【表2】でみたように

表3 全神戸映画サークル協議会の結成初年（1950年）における入場割引対応の映画館

地区	映画館名	割引方式	所在地	経営者	定員	翌年の対応
新開地	KS映画会館	会員証提示のみ	兵庫区福原町	山陽興業	450	継続
	神戸大映	会員証提示のみ	兵庫区福原町	神戸大映	850	継続
	福原国際	会員証提示のみ	兵庫区福原町	芦沢春雄	312	継続
	相生座	特別券が必要	兵庫区仲町西通2	牧倉人	700	継続
	ロマン座	特別券が必要	兵庫区大開通1	東映劇場	900	継続
	松竹座	特別券が必要	兵庫区福原町	松竹	1103	継続
	神戸山陽映画	—	兵庫区下沢通1	山陽興業	400	新規
	神戸映画劇場	—	兵庫区湊町4	久保佐一	600	新規
三宮	三宮キネマ	会員証提示のみ	生田区三宮町1	三宮キネマ	337	継続
	阪神劇場	特別券が必要	葺合区小野柄通8	阪神電鉄	450	継続
	太洋洋映画劇場	特別券が必要	三宮町1	久保佐一	460	停止
	東亜劇場	指定作品のみ	生田区北長狭通2	後藤産業	500	停止
	邦楽座	交渉中	生田区三宮町1	田中富雄	850	停止
	阪急会館	交渉中	生田区加納町4	OS映画	1983	停止
	三宮劇場	交渉中	北長狭通1	OS映画	1078	停止
	三宮映画	交渉中	北長狭通1	OS映画	447	停止
元町 (栄町)	神戸ABC	指定作品のみ	生田区栄町2	朝日ビルディング	605	停止
	名画会館ニッサン	指定作品のみ	生田区栄町2	光文化興業	382	停止
兵庫	ロキシー劇場	—	兵庫区兵庫駅高架下	真武喜代子	198	新規
長田	国際劇場	会員証提示のみ	長田区二葉町4	周金甫	335	継続
板宿	板宿銀映	会員証提示のみ	須磨区平田町	川本寿	250	継続
	板宿キネマ	—	須磨区飛松町1	板宿キネマ	200	新規

『映画時報』（1号、1950年、009-01-0092）、全神戸映画サークル協議会「明けましておめでとうございます」（1951年、213-01-0002）、『映画年鑑 1950年版』（時事通信社、1950年）、『映画年鑑 1951年版』（同、1951年）より作成

港湾・工場労働者を中心としていたことが挙げられるだろう。すなわち、興行の立場からは集客しやすい、観客の立場からは通いやすい新開地の映画館は、全神戸映画サークル協議会と、入場割引を通じた協力関係を継続的に構築していったと考えられる。当時の神戸で高級館とされた¹⁹⁾元町の2館が、どちらも1950年に指定作品のみの割引に限られ、かつすぐに入場割引を停止したことが、そのことを示している。

ただし、そのような観客層の問題だけではなく、そもそも新開地と三宮の映画館では、戦前から入場料に関して異なる傾向がみられた。三宮が、阪急会館を中心に、入場料は高価だが近代的な設備が整った映画館により成り立っていたのに対し、新開地の映画館は、すでに定期的に入場割引を実施していたのである²⁰⁾。このような映画館街としての性質の違いも、新開地の映画館が、映画サークル運動による入場割引の要請を受け入れる土壌になっていたと考えられる。

5. 入場割引の廃止にともなう諸問題

前節では、全神戸映画サークル協議会が結成された1950年代初頭の映画館との関係を論じた。本節では1950年代末期、全神戸映画サークル協議会が、自主上映を進めようとする神戸自主映画協議会と、批評を中心にしようとする木崎らの大衆批評研究会に分裂する直接的な契機となった、神戸興行協会による全神戸映画サークル協議会の会員への入場割引の停止をめぐる問題について考察していきたい。

すでに言及したように、1957年の「環境衛生関係営業の運営の適正化に関する法律」は、各地の興行組合による映画サークルへの入場割引の停止をもたらし、東京では14万人の会員が3万5千人に、福岡では3万人が4千人に急減するなど²¹⁾、運動の大幅な後退をもたらした。ただし神戸においては、直ちに大きな影響はみられなかった。この点について、機関誌『泉』は、次のように伝えている。

割引の停止について 神戸興行協会の臨時総会決議によって、10月1日より会員証で直接割引を取扱っていた座館の割引入場ができなくなります。ただし、事務局ならびに四連絡所で扱っている金券割引については、従前通り取扱っています。²²⁾

すなわち会員証の提示のみによる入場割引は受けられなくなったものの、事務局や連絡所で「金券割引」とよばれた割引券を購入できたため、神戸では大きな混乱が生じなかったのである。『泉』の別の記事では、「渉外部の活動によって、従来会員証で通用していた座館九十九%が金券取扱いに切換え可能となり、^{ママ}絡所も春日の道、宇治川、長田（交渉中）板宿（交渉

中)と新設が実現しつつあります」²³⁾と報じている。

そもそも神戸では1957年に、早くも入場割引の方法をめぐって全神戸映画サークル協議会で議論があり、「四種類の割引券を全部廃止し、新開地、三宮地域の封切館と名画上映館の阪急文化、神戸名画、スカイシネマを金券のみの取扱いとしほかは全部会員証提示による割引き」にするものとなっていた²⁴⁾。すなわち全国的な入場割引の停止という問題が生じる前に、神戸の主要な封切館や名画座である、三宮の阪急会館、三宮東宝、阪急文化、三映、三劇、朝日会館、国際日活、大洋劇場、東亜劇場、阪神劇場、京町映劇、元町映劇、スカイシネマ、新開地の松竹劇場、聚楽館、松竹座、ロマン座、第一映劇、相生座、神戸東宝、神戸シネマ、キネマクラブといった映画館は、会員証の提示ではなく割引券の購入による入場割引が、すでに実施されていたという背景があった。また山本明コレクションには、全神戸映画サークル協議会が作成し、映画興行に関する諸団体等の情報がまとめられた『渉外部関係資料集』（全神戸映画サークル協議会渉外部、1958年、213-01-0123）や、映画興行の直面している課題がまとめられた「資料 渉外部会」（1958年、213-01-0124）といった調査資料が含まれており、1958年の段階で全神戸映画サークル協議会は、かなり入場割引に関する問題の調査を進めており、その停止を防ぐべく努力が続けられていたものと考えられる。

しかし1962年になると、割引券による入場割引も停止され、全神戸映画サークル協議会は、神戸興行協会が設立した神戸映画鑑賞会に加盟し、その会員として入場割引を受けるという方法に変更させざるを得なくなり、会員数の大幅な減少を避けられなくなった²⁵⁾。

このような状況が生じた背景について『泉』は、映画会社の大作主義によって「会社の規定する料金を上回る割引ができなくなったばかりか、映画サークルとしての割引の独自性を奪われる傾向」があるとともに、「観客の減少から徴税予定額の上がない税務署は、入場税のとりたてを権限以上にきびしくし」、「入場税が軽減された四月以降は、いかに動員を保証しても三割以上の割引が不可能になった」ことを挙げている²⁶⁾。特に後者の入場税に関する変更は、会員の入場割引の停止と同時期であり、これが従来の入場割引の方針を変更せざるを得なくなった、大きな要因であったと考えられる。

6. おわりに

全神戸映画サークル協議会が、第4節で論じたように、とりわけ新開地の映画館との結びつきが強かった点も、その「盛り場」としての衰退が、入場割引の停止に影響したものと推察される。第5節で論じたような入場割引の停止は、神戸の映画館街の変容ともあわさり、避けようなかった問題なのである。たとえば『泉』誌上では、新開地の映画館主を招いて、先述した「木崎理論」の木崎敬一郎と座談会を開いているが、下記のように同地区の映画館街の苦境

が述べられている。

新開地というのは、映画産業自体の斜陽傾向と神戸市という都市構造の変化にともなう地理的な斜陽傾向が二重にかさなって、斜陽傾向が非常に強いわけですね。(中略)神戸の映画人口というか実際に映画を見にこれる可能性をもつ人口というのは大体六〇万ですね。市内にいま映画館は七八あるわけだから、一館あたり平均一万を切れるということですよ。京都とか大阪の南、北などは可能人口一〇万といわれてるのと比較すれば、神戸のむずかしさというのがわかると思います。²⁷⁾

そして、新開地の映画館街の衰退も、全神戸映画サークル協議会の会員減少も、両者の直接的な関係性という以上に、本質的には上記にある「都市構造の変化」という問題と結びついていた。港湾・工場労働者を中心とした全神戸映画サークル協議会と、彼らを観客とした新開地の映画館は、工業都市から商業都市への神戸の「都市構造の変化」、すなわち三宮への都市機能の集約とともに、歴史のなかで置き去りにされざるを得なかった存在となってしまったのである。

しかしそのことは、逆にいえば神戸の映画サークル運動と、新開地の映画館との間に、共生的な関係があったということでもある。それは東京のように、1957年の興行組合による入場割引の突然の停止から、映画サークルの会員数の激減が直ちに引き起こされるという事態の発生を避け、相対的に過ぎないものの、今日に至るまでの両者の持続的な関係を可能としたといえるのではないだろうか。

謝 辞

本稿の執筆にあたり、神戸映画資料館の安井喜雄館長より関連資料の提供、ならびに令和2年度大学発アーバンイノベーション神戸「神戸の映画館文化の振興に向けた参加型デジタル・アーカイブ構築」(神戸市企画調整局)の助成を受けました。

註

- 1) 代表的な論考として、以下を参照のこと。瓜生忠夫「ウドの大木たるなかれ」『学習の友』36号、1956年、佐藤忠男「映画サークルの運動」『文學』27巻10号、1959年、松本俊夫「大衆という名の物神について」『記録映画』5巻2号、1962年、山之内重己「映画サークル運動の十年」1~9『記録映画』5巻1号~6巻7号、1962~1963年
- 2) 成田龍一「『サークル運動』の時代 ―一九五〇年代・『日本』の文化の場所―」河西英通・浪川健治・M.ウィリアム・スティール編『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ 多

山本明コレクションにみる全神戸映画サークル協議会の地域性（上田）

文化の歴史学と地域史』岩田書院，2005年，253頁

- 3) 佐藤洋「映画を語り合う自由を求めて——映画観客運動史のために」黒沢清・四方田犬彦・吉見俊哉・李鳳宇編『日本映画は生きている 第三巻 観る人，作る人，掛ける人』岩波書店，2010年，22頁
- 4) 同上，34頁
- 5) 山之内前掲稿5，1962年，39頁
- 6) 塩見正道『「木崎理論」とは何か 映画鑑賞運動の理論と木崎敬一郎』風来舎，2018年
- 7) 塩見によれば，帝国酸素，日本発動機などの労働者が運南地区映画サークル協議会を結成し，それが全神戸映画サークル協議会の母体になったという（神戸100年映画祭実行委員会・神戸映画サークル協議会『神戸とシネマの一世紀』神戸新聞総合出版センター，1998年，121頁）。
- 8) 塩見前掲書，1998年，123頁
- 9) ただし，神戸では他の都市・地域と異なり，映画館の割引券を，全神戸映画サークル協議会の事務所や連絡所で購入できたため，それほど影響はなかったという（塩見前掲書，1998年，126-127頁）。この問題については，本稿5節を参照のこと。
- 10) 佐藤前掲稿，2010年，31頁
- 11) 木崎敬一郎「資料 映画文化の変革を目指す運動集団 映画サークル協議会の性格について」塩見前掲書，2018年，113-121頁
- 12) たとえば，先述した東京映愛連の山之内は，「木崎理論は大きな影響力をもっていたし，変革のイメージそのものを深める大きなきっかけともなり，今まで正面に出しきれないでいた批評の問題が思想の変革の意識としてとらえられるようになった」と，高く評価している（山之内前掲稿7，1962年，34頁）。
- 13) 塩見前掲書，2018年，49頁
- 14) 松本前掲稿，1962年，20頁
- 15) 山際永三「映画批評とは何か？」『記録映画』1963年5月号，1963年，34-35頁
- 16) ただし，関東大震災後に神戸が外国映画の配給拠点となった一時期においては，『キネマ旬報』の本社が香櫨園に移転するなど，阪神間から全国に映画批評の言説が発信された（上田学「昭和初期の神戸市・兵庫県における映画の配給と興行」板倉史明編『神戸と映画 映画館と観客の記憶』神戸新聞総合出版センター，2019年，61-64頁）。
- 17) 吉村道子・増田正毅・高倉光夫「矛盾のなかで——映画サークルと批評活動——」『映画批評』1958年12月号，48-51頁
- 18) 高倉光夫「映サと批評活動——方向とその実態——」『映画批評』2巻8号，1958年，49頁
- 19) 金融街の栄町通に立地した神戸ABC，ニッサン館の2館は，それぞれ山下汽船，日産汽船が戦後直後に汽船業を経営できなかった時期に，自社ビルを転用し開館した高級映画館であったという（西村大志「「盛り場」新開地から「都市」三宮へ——神戸の文化と都市機能の変遷」板倉前掲書，2019年，35頁）。
- 20) 西村前掲稿，2019年，27-28頁
- 21) 佐藤前掲稿，2020年，27頁
- 22) 「割引の停止について」『泉』93号，1959年，1頁（213-01-1605）
- 23) 「長期体制で割引復活を 再映館99%を金券取扱に切換え」『泉』94号，1959年，2頁（213-01-0064）。連絡所は，三宮の近藤タバコ店，新開地の松本タバコ店，西新開地の時田薬局，春日野道のこまや糸店，灘の喫茶デリシャ，宇治川の宝屋日用品店が兼務していた（「金券取扱連絡

所ご案内」『泉』94号, 1959年, 4頁(213-01-0064)。

- 24) 「やゝこしい割引方法の改革 金券と会員証の二本建になる」『神戸映画の友』59号, 1957年, 11頁(213-01-0026)
- 25) 神戸100年映画祭実行委員会・神戸映画サークル協議会前掲書, 1998年, 127頁
- 26) 「映画界がおしつけてきた困難」『泉』124号, 1962年, 2-3頁(213-01-0070)
- 27) 「支配人のなげきと斗い」『泉』127号, 1962年, 3頁(213-01-0071)

要 旨

本研究は、1950年に発足した全神戸映画サークル協議会が、映画館の地域性とどのように結びついていたのかを、京都大学人文科学研究所が所蔵する山本明コレクションの関連資料から明らかにしたものである。第1章で映画サークル協議会の地域性という問題の所在と先行研究について述べ、第2章で全神戸映画サークル協議会が、1950年代後半の映画サークル運動の停滞期にみせた、自主上映運動という本流とは異なる、映画批評の革新を求める独自の動きを紹介した。第3章で、山本明コレクションに含まれる全神戸映画サークル協議会の発行誌の多様性をまとめ、『泉』『レフレクター』など全国的に知られた批評誌をはじめ、その出版活動が意欲的なものであったことを明らかにした。第4章で、全神戸映画サークル協議会と協力関係にあった映画館が、新興の映画館街の三宮や、元町の高級映画館ではなく、港湾や工場の労働者を重要な観客層とする新開地の映画館であったことを指摘した。さらに第5章で、神戸における入場割引停止をめぐる映画サークル協議会と興行協会の対立は、新開地の衰退と三宮の興隆という、神戸の都市構造の変化と結びついていることを論じた。最後に、全神戸映画サークル協議会は、全国的にみても活発な批評・出版活動をおこなっていた映画サークル運動であり、その活動の盛衰や映画館との関係は、新開地から三宮への「盛り場」の移行、神戸という都市の変容とも結びつくという地域性を有していたことを指摘した。

キーワード：映画サークル運動，神戸，新開地，映画館，映画雑誌

Abstract

This paper analyzes materials belonging to the Yamamoto Akira Collection to demonstrate how the All Kobe Film Circle Council (Zen kōbe eiga sākuru kyōgikai), which was established in 1950, was affected by the regional characteristics of cinemas. Chapter one reviews existing research and discusses the regionality of the Film Circle Council. Chapter two demonstrates how the All Kobe Film Circle Council attempted to enhance the quality of film criticism during the latter part of the 1950s, during which the film circle movement had stagnated. Chapter three summarizes the multiple magazines published by the All Kobe Film Circle Council that are held by the Yamamoto Akira Collection. This chapter explores the publishing activities of the council. In Chapter four, I show that the cinemas that cooperated with the All Kobe Film Circle Council were not the newly emerging area of Sannomiya or the high-class cinemas of Motomachi, but rather cinemas located on the old cinema street of Shinkaichi, which was frequented by port workers. In Chapter five, I argue that the conflict between the All Kobe Film Circle Council and the All Kobe Entertainment Association over the suspension of admission discounts was linked to the decline of Shinkaichi and the rise of Sannomiya, which brought about a change in the urban landscape of Kobe.

Keywords : film circle council, Kobe, Shinkaichi, cinema, film magazine